

経済とこころ

大分県・大分東明高等学校 2年 丸尾 宗一郎

先日、新聞を読んでいると書評で『今日、ホームレスになった』という本が紹介されていた。これはホームレスの経歴を聞き取り、嘆きを記録しただけの本ではないという。安定した職についていたはずの人間が、遠い存在だと思っていたホームレスになる。そんなことも現在の社会では十分ありえることだと警鐘を鳴らしている。

実際に、公園などでホームレスを目にすることもがあるが、なんとなく遠い存在であると思われたい。そのうえホームレスなんかは真面目に生きてこなかった人間がそんな風になるものだ、とさげすんでさえいた。しかし、どうやらそうともいえないらしい。

ある調査で、ホームレスの平均年齢は55.9歳であるということ、それから約81.7パーセントが男性であるということがわかった。

普通の社会生活を営んでいた人たちが、突然、定年間近になって解雇され、ホームレスになる。普通の生活を真面目に送っていた人もホームレスもほとんど紙一重の場合もあるのだ。

また、ホームレスについて調べていくうちに衝撃的な事実突き当たった。日本には経済苦を理由に自殺する人が7,700人以上。

さらにその裾野には2万5,000人を超えるホームレスや予備軍の存在がある。これらの事実を突きつけられると完全に他人事であるとは思えなくなってくる。

しかし、ここで問題にするのは悲惨なホームレスの状態ではなく、このような状況を作ってしまった、日本社会である。

では、なぜ日本がこういう状況に陥ってしまったのか。

それが、資本主義、物質主義、金銭至上主義であるということは言うまでもないことだと思う。

徹底した資本主義は実力主義の社会を生み出す。現に実力主義の横行で、教育の二極化などの問題がおき、その是非が叫ばれている。生まれた家庭の環境で未来が限定されてしまうとしたら、なんともやりきれない話ではないか。

教育の二極化だけではない。社会全体が二極化している。先日、新聞で、非正社員は結婚している人の数が正社員より極端に少ないという記事を読んだ。人生の豊かさを得ることも、限定されてしまうのか。

つまり実力社会は人間から人間としての最低限度の生活も奪ってしまっているのだ。

実力社会アメリカでは、上位1パーセン

トの人が国富の半分近くを保有しているという状態だ。日本もこの後を追うつもりらしい。

これは藤原正彦著の『国家の品格』に書いてあったことだが、更に実力主義が進めば、誰もが敵という事態もおこりかねないという。

例えば、上司は部下にノウハウを教えなくなる、教えたら最後、自分が蹴落とされてしまうからだ。いつも敵に囲まれているという非常に不安定な、穏やかな心では生きていけない社会になってしまう。

実際にこのような事態を避けるために、日本にはかつて年功序列や終身雇用といった制度があった。年功序列が根底にあれば、みんなが安心し、安定した社会になる。実際に日本は第二次世界大戦後、そのシステムで経済成長を遂げ、第2位の経済大国になってきたはずだ、と。

私も、この意見には共感する。

実力主義社会というのは、実力のない人間を「受容できない」社会だと思う。「受容できない」社会というのは、本当に成熟した社会とはいえない。徹底的な勝者をつくり、徹底的な敗者をつくる社会はいつか破綻を生むのではないか。

私は徹底した実力主義、経済至上主義にはやはり疑問を感じずにはいられないのである。今まで述べてきたように、そのような

社会は人の心を壊してしまうことさえあると思うからだ。

取り沙汰された、ライブドアや村上ファンドのように、利益を求め過ぎると周りが見えなくなる。

そもそも資本主義経済とは、人間を豊かにするために作られたはずのものだ。現代社会では、それが一人歩きを始めてしまい、人間の手に負えないものになっている。企業は自社の利益のみを追求し、社員をかえりみず方針を打ち立てていく。その社員の家庭は段々と崩壊していく。その家庭の子供は真つ当な教育を受けられなくなる。働きたくても、働けず、諦め、犯罪に走る。極端かもしれないが、まさに悪循環だ。

「各自が利己的に利潤を追求していけば、『神の見えざる手』に導かれ、社会全体として調和し豊かになっていく。」というアダム・スミスの理論にも疑問が湧いてくる。全世界の人々が金銭亡者になれば環境問題なども決して解決することはないだろう。

経済と心というのは密接に関係していると思う。その時代時代の人々の精神の在りようが経済に反映されるのではないか。

いま、日本は全体として受容の精神がなく、欲望のままに進んでいくように見える。

人々が物質ではないところに幸せを感じられるようになれば、日本の経済も変わってくるのではないだろうか。